

沖大で財務諸表論を講義することになりました



(4月のごあいさつ)

平成23年4月1日(金)

東日本大震災は声も出ないような大きなショックでした。また、それに伴う原発事故の発生、日本人の心も、社会も、経済も大きな変革期が来ているのでしょうか。一日も早い、身心の回復と社会や経済の立ち直りを願うばかりです。

4月から沖縄大学法経学部で「財務諸表論Ⅰ、Ⅱ」の講義をさせていただくことになりました。教えるというよりは、学び直すという感じで準備をしています。

会計は事業の言語であるとともに事業活動の成果を説明し、ひいては**経済事象を映す鏡**の役割を果たすものです。

この20年間の**会計の変化**は、グローバル化の進展と実物財から金融財へと重点が移った経済の実態を描写しようという一連の試みであると感じています。

経済の変化のスピードには遠く及ばず後追いの中での混乱は起きていますが、、、

その意味で**IFRS**の出現と導入へ向けた動きはその象徴的なものだと思います。

国外におけるエンロンやワールドコム、国内における西武鉄道やカネボウやライブドアなどの**会計不信**を経て、会計の重要性は大きく認識されてきました。

IFRSは、退職給付会計、リース会計、金融商品会計などオフバランス項目のオンバランス化という**バランスシートの改善**に大きな貢献をしています。

グローバル化した経済を概観すると世界と時代の変化が身に沁みます。

1985年のプラザ合意に始まる急激な円高の中で実物経済で成長した日本はマネー経済へと突入し、バブル経済の渦中に嵌りこみました。アジア危機を経てその比率は大幅に増え、実物経済に対し9:1とも言われるほどに肥大化した**マネー経済**は、21世紀に入って遂に世界経済危機を招くほどに大きくなりました。

このような現象に直面して、企業の**経済活動を映し出す鏡**としての会計は変化せざるを得ません。

実物経済からマネー経済への変化の中で、従来の制度会計も大きく変わるべきで、**有用な会計情報**の意味も変化と進歩をしている過程にあります。

製造業を前提とする経済活動を基礎に成長した**近代会计学**、即ち過去にどれだけ利益をあげたかという**実現利益**を中心とした計算体系は変化せざるを得ません。

IFRSは大きなフレームワークを基礎に問題を整理し、会計の役割を再考し利用者に有用な会計情報を提供しようとしていると考えられます。

IFRSという視野の中での広い**会計観**を基礎に有益で実質的な会計基準を学びたいと思っています。